

『愛知県史 資料編20 近世6 学芸』

岸野 俊彦

本書は二〇一二年三月に刊行された。構想、編集、執筆に關つた立場から、本書の構成と収録史料の内容、意義について紹介したい。

一、本書の構成について

本書は第一章「門人帳から見た文化世界」、第二章「書翰からみた文化世界」、第三章「出版書画書籍の文化世界」の三章で構成した。この意図について以下に述べたい。

すぐれた学問的著作や文芸、書画作品を残した著名人は、尾張・三河地域にも多くいるし、著作や作品も残されている。しかし、著作や作品の内容を問うのと同時に、彼等が何故そのような作品を残すことができたのかを問うことは、内容の理解を助けるばかりでなく、新しい文化社会論を提起するための糸口になる。どのような領域の学者や作家であれ、著作や作品を創り上げるためには、幼少期の教育、専門領域の師弟関係・交友関係が必要である。各種門人帳や人名録は、この内容を見つける手がかりとなる。本書第一章に「門人帳から見た文化世界」

を設定したのは、このためである。また、著作や作品を創るためには、師弟間、友人間、出版書肆等との情報交換が不可欠である。書翰には家族、地域社会、全国的な社会情報等の外、こうした文化関係情報が含まれている場合が多い。本書第二章で「書翰からみた文化世界」を設定したのは、このためである。近世文化の特徴は、武士の外、商人、職人、農民の間での識字率の高まりにより、多くの本屋が生まれ出版するようになったことである。名古屋でも、永楽屋東四郎をはじめとする多くの本屋や、「大惣」などの貸本屋の存在が知られている。従来は、出版された書籍や出版目録、蔵書目録から、その出版営業実態を明らかにする方法がとられた。本書では、本屋の側からではなく、町や村に残された史料から、本屋等の営業活動の実態を明らかにすることに視点を置いた。商人や村役人であったお宅を訪ねると、多くの書籍が残され、蔵書目録が作られていたりする。また、文書群を詳細に見ていくと、本屋や貸本屋の売買や貸借の「覚」を見つけることがある。これを集積すると、本屋の営業実態が見えてくる。また、こうしたお宅には、書籍の外に書画類や書画目録も残存する。また、各地で本屋と地域文化人が結び、書画会を開催しているが、この記録や宣伝文書が残されてもいる。また、俳諧、囲碁、医者等の地域における見立番付なども多く残されている。これは、地域社会と全国社会とを結び、近世文化の全体像や広がりを見る上で重要な要素である。本書第三章で「出版書画書籍の文化世界」を設定したのは、

この関心による。

二、収録史料について

ここでは、各章の内容について紹介したい。

第一章 「門人帳からみた文化世界」

本章では、従来部分的にしか行われてこなかった門人帳や人名録を、できる限り収集することにとめた。この結果、門人帳等に雅号、俗名、住所等が記載されている尾張・三河に関する者だけでも、延べ一万人近い人々を明らかにすることができた。中には肖像画や写真を残している者もあり、これらも合わせて収集した。これを、第一節「地域文化の交流」、第二節「地域医療の広がり」、第三節「国学門人帳」、第四節「漢学・漢詩門人帳」、第五節「医学・蘭学門人帳」、第六節「文芸門人帳」、第七節「地域教育門人帳」に分けて、一二〇頁分を撰定して収録した。しかし、これでは不十分なので、収集した全ての門人帳をデータベース化し、付録のCD-ROMに収録した。延べ一万人について、門人帳等の名称や人名・雅号等から検索でき、肖像画や写真についても表示できるデータベースとなっている。一人の人物が複数の門人帳に登場したり、全国規模の門人帳もあり、地域での活動だけでなく、江戸、上方をはじめとした全国での活動もわかり、重層的な門人社会の構造が浮かび上がる。是非活用していただきたいと思う。

第二章 「書翰からみた文化世界」

本章には全体の約七割、六七〇頁ほどを割いた。それを以下の九節に構成した。第一節「伊藤圭介関係書翰」、第二節「秦鼎関係書翰」、第三節「村上忠順関係書翰」、第四節「国学関係書翰」、第五節「漢学関係書翰」、第六節「医学・蘭学関係書翰」、第七節「文芸関係書翰」、第八節「地域文化人書翰」、第九節「大坂天満屋敷中西家関係書翰」である。

この内、頁数割で特に重点を置いたのは、伊藤圭介関係書翰と村上忠順関係書翰である。伊藤圭介は、名古屋の町医から尾張藩医となり、幕府の番書調所出役等を経て、明治維新後は、文部省出仕、わが国最初の理学博士、東京帝大名誉教授である。水谷豊文に本草学、吉雄常三に蘭学、シーボルトに植物学等を学んだ。収録したのは、書翰八〇通と来翰七一通、合わせて一五一通である。発信者は、吉雄常三、藤林晋山、宇田川榕庵、高野長英、坪井信道、箕作阮甫、江馬活堂、飯沼慾齋、賀来佐之、賀来飛霞、上田仲敏、川本幸民、田中芳男、シーボルト等、家族を除き五〇名を超え、多彩である。村上忠順は、三河碧海郡堤村（現豊田市）に生まれ、名古屋の町医加藤敬順に從学し、天保元年（一八三〇）年堤村で開業した。名古屋遊学中に、万葉集を秦鼎に、古事記を植松茂岳に学び、嘉永二年（一八四九）には、名古屋出身の国学者で紀州藩士の本居内遠に入門している。嘉永六年、父の後を継ぎ、刈谷藩医となっている。

『元治元年千首』、『河藻歌集』等の著作がある。娘婿である碧海郡新堀村(現岡崎市)の富商深見篤慶の援助もあり多大の書籍を収集し、「千卷舎」と称する文庫を作った。この書籍の大部分は、現在刈谷市中央図書館村上文庫に収蔵されている。村上家には、五〇〇通を超える書翰が残されていた。交信者は、三河の羽田野敬雄、岩上登波子、名古屋の加藤敬順、大河内存真(伊藤圭介の実兄、尾張藩奥医師)、秦鼎、植松茂岳、紀伊の熊代繁里、西田惟恒、遠江の石川依平、飛騨高山の富田礼彦、豊後の物集高世、江戸の橋守部、出雲の森為泰等で、その交友の広さが理解できる書翰を中心に撰定収録した。

第三章 「出版書画書籍の文化世界」

本章では、第一節「本屋の営業活動」、第二節「書画目録」、第三節「書画会」、第四節「見立番付」の四節構成とした。このうち本屋の営業活動については、本屋の広域的活動という観点から①名古屋の永楽屋東四郎、風月堂孫助、井筒屋(暗月堂)文助、美濃屋清七、美濃屋伊六等の尾張、三河での営業活動、②永楽屋東四郎の江戸店「永東文助」と奥州瀬上宿(現福島市)の呉服商で本居大平門人の内池永年との書籍売買の実態、③三河の村上忠順と紀州の本屋坂本屋喜一郎との出版をめぐる交渉実態が分かる史料を中心に収録した。書籍や書画目録については、多く残され収集もしたが、すでに地域編(東三河、西三河、尾西北、尾東知多)に、いくつかは収録していること、ま

た、書画目録や書画会に比べて、研究上の問題関心が広がっており研究も進んでいることから、割愛した。

三、残された課題

通常、思想史や文化史を研究する場合、著作や日記が基本となる。このため自治体史の近世「文化」「学芸」等の編集に当たっては、その地域のすぐれた学者や文芸作家等の著作や日記類を収録する機会が多い。しかし、本書では、こうした史料については、一切収録していない。尾張、三河地域にも多くのすぐれた学者や文化人が存在し、著作や日記も多く残存する。これらは、まとまって残りやすい性質を持っており、公共図書館、資料館等々に収蔵されている場合も多い。他方、本書に収録した史料群、特に書翰や「覚」等の一紙物は、纏まって残りやすく散逸しやすい。また、書翰や「覚」等は、背景についてのいろいろな知識や情報がないと内容が理解できないこと、個性豊かで読みづらい文字で書かれており、史料調査の際、目録が取りにくく、「雑一括」とまとめられてしまう場合も多い。本書が、著作や日記を収録しなかったのは、軽視しているわけではなく、所与の頁数の中で、散逸や滅失の危険にある書翰類の収集、収録に重点を置き、それを後世にできるだけ残したいと考えたからである。このため特に書翰に約七割、六七〇頁程を割いたことはすでに述べた。これらの理解のため、注と解説を付したが、その他、五二一人についての人名注を付した。門人帳

等の検索と合わせ、人名注を利用すれば、書翰等の人間関係も理解しやすいのではないかと思う。思想史や文化史を研究する場合、著作の内容と研究者が直接向き合い格闘するばかりでなく、本書が提供するような、門人帳や書翰、本屋の出版と営業活動など、全般的な文化社会基盤を踏まえた、新しい研究成果が生まれることを切望している。是非、活用していただきたい。

（名古屋芸術大学教授）